

法然上人の選択本願説

林 啓 碩

法然が今迄の八家九宗の仏教を捨てて、浄土宗を開創した根本義は何かといえ、それは選択本願念仏の提唱即ち阿弥陀仏の本願を信じ、口称念仏を専修することにある。我々罪業深重の凡夫のなすべきことは、阿弥陀仏がその本願に衆生往生の行として選択された南無阿弥陀仏の各号を称することであり、これを修すれば仏の本願力によつて、浄土に往生することが出来ることを明したことである。この一向に念仏を専修することを勧める法然教学の特色は「選択」の二字に尽きるのであるが、それについて鎮西は「徹選択集」に

問上人、選択者、是何義乎。答善導和尚意。念仏者本願往生念仏也。弥陀四十八願之中第十八願是也。此本願義之上。「法然上人檢浄土三部之諸本。校同本異訳之諸文。而今勸出法蔵菩薩選択義也。(中略)即是法

然上人之義也。此義尤可甘心。尤可甘心。上手自料簡三部經、我朝始立此義。唐土人師所立義之中。此選択之義全以無之云云(浄全七・八)と述べて選択の一義は弥陀、竜樹、法然と伝承の遠く深いことを説き、更に良忠は「浄土宗要集略書」本に法然の言葉を引き

諸師作文。必本意有一、慧心立、因明直弁之義、善導釈、選択本願念仏一義、予立選択、造、選択集也云云(浄全十・二六二)

と伝えられている。

かように法然教学の特色である「選択」の義に帰納して、念仏往生の法門を説かれたのであるが、選択の意味は選捨、選取の二義を含んでいる。そして法然は「選択集」において三重の選択を示して

夫速欲離生死二種勝法、中且闍聖道門、選入浄土門。欲入浄土門、正雜二片中、且揔諸雜行、選應歸正行。欲修於正行、正明二業中、倘傍於助業、選應專正定。正定之業者、切是称仏名。称名必得生。依仏本願故。(法然全集三四七)

と述べている。即ち一に捨聖帰浄、二口捨難帰正、三に称名攝取を説いたのであるが、要するに法然の選択本願の念仏は畢竟この三重の選択の域を出ないのである。そして称名念仏の一行が本願であり、それによつて浄土に往生を得ることを明確に示されている。

この称名の一行を重要視した法然は、それについての「選択集」に

四十八願之中、既以念仏往生之願、而為本願中之王也（法然全集三二六）

といい、「津戸三郎へつかはす御返奉」に

釈迦のすゝめ給も、悪人善人愚人も、ひとしく念仏すれば往生すゝめ給へる也。されば念仏往生の願はこれ弥陀如来の本地の誓願なり

と述べている。かように四十八願の中第十六念仏往生の願を仏の本願とするかといえ、「選択集」に（法然全集三一九）

念仏は勝、餘行は劣。念仏勝者名号者は萬億之所帰也。然則弥陀一仏所有四智三身十力四無畏等一切内証功德、相好光明說法利

生等一切外用功德、皆悉攝在阿弥陀仏名号之中、故名号功德最勝也。餘行不然。各守一除。是以為劣也。

と述べて称名を本願とすることを明確にしている。

この選択本願念仏説こそは、法然をして日本浄土教を確立せしめたものであり、法然をして浄土宗の開祖とした、それは正しく法然独自の体験にもづくものであり、その思想形成は、仏の慈悲により、弥陀に随順、信順して、実践的仏教の道を取られたことにもよる。そして、富貴貧賤、智慧高才、愚鈍下智、持戒接律、無戒破戒のものも、すべて弥陀の報土に往生できるといふ万人平等の教、救済の教であることを確立して、選択本願の義を強められたのである。

弥陀の本願は五濁惡世の現実の穢土と罪惡生死の凡夫の自己の惡業に悩むものにとつての光りであり、その仏の本願は法然の心のよりどころともなり、一般庶民に対しても強い味方となつたのである。